

令和7年中の薬物情勢

神奈川県内の薬物の検挙人員は978人で、そのうち大麻事犯の検挙人員は561人と、全体の約半数を大麻事犯が占めました。(表1)

また、覚醒剤事犯の検挙人員は40歳以上で約65%、大麻事犯の検挙人員は30歳未満で約70%を占めています。(表2)

県内の薬物事犯検挙人員 (表1) ※暫定値

区分	令和7年 全体(20歳未満)	令和6年 全体(20歳未満)
覚醒剤事犯	353人 (6人)	387人 (6人)
大麻事犯	561人 (128人)	449人 (80人)
麻薬及び向精神薬事犯	63人 (6人)	78人 (10人)
あへん事犯	1人 (0人)	0人 (0人)
計	978人	914人 (96人)

年代別検挙人員 (表2) ※暫定値

年代	覚醒剤事犯		大麻事犯	
	人員	構成比	人員	構成比
20歳未満	6人	1.7%	128人	22.8%
20~29歳	50人	14.2%	281人	50.1%
30~39歳	63人	17.8%	77人	13.7%
40~49歳	104人	29.5%	55人	9.8%
50歳以上	130人	36.8%	20人	3.6%

(表1、2は県警察本部資料より引用)

お知らせ

INFORMATION

令和8年度 薬物乱用防止講演会について

薬物乱用防止講演会を、横浜市、川崎市、相模原市、横須賀市、藤沢市、茅ヶ崎市及び県と共催により開催します。

日程：令和8年5月14日(木)
場所：横浜市開港記念会館
(横浜市中区本町1-6)
内容：未定(決定次第、県ホームページに掲載)

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/n3x/yakumu/yakutai/cnt/clean.html>

県薬務課ホームページ

※諸事情により、開催方法の変更又は中止になることがあります。



薬物クリーンかながわ 推進会議 会員募集

薬物クリーンかながわ推進会議は、県内の各種機関・団体が相互に連絡・調整を図りながら、県民一体となった薬物乱用防止啓発運動を行っています。

随時会員を募集していますので、趣旨にご賛同頂ける方がいましたら、事務局までお知らせください。(入会費、年会費等はありません)

加入団体数 182 機関・団体 (R8.2月末)

令和7年「ダメ。ゼッタイ。」 国連支援募金の結果

募金は、国連薬物犯罪事務所を通じ、開発途上国の薬物乱用防止活動を行うNGOのプロジェクトを援助しています。また、国内の啓発事業にも役立っています。令和7年度神奈川県における募金額は次のとおりでした。ご協力ありがとうございました。

募金額 978,911円

(令和7年12月16日締)

県薬務課からのお知らせ

○薬物乱用防止教室について

県薬務課では、学校等で開催される薬物乱用防止教室に、麻薬取締員や薬物乱用防止指導員等を講師として派遣しています。県薬務課ホームページを参照のうえ、ぜひお申し込みください。

また、薬物乱用防止教室は薬の専門家である各学校担当の学校薬剤師も積極的にご活用ください。

【県薬務課ホームページ】 <https://www.pref.kanagawa.jp/docs/n3x/yakumu/yakubo/yakubo.html>



薬物クリーンかながわ

発行日：令和8年3月25日

発行者：会長 長津 雅則

編集：薬物クリーンかながわ推進会議広報委員会

【事務局】神奈川県健康医療局生活衛生部薬務課内

〒231-8588 横浜市中区日本大通1

TEL.045-210-4972(直通) FAX.045-201-9025

No.43

43号

Drug Clean
Kanagawa

薬物クリーン かながわ



若者はなぜ薬物を使うのか～スクールカウンセラーと 依存症支援の現場から～

講師：大宮宗一郎(上越教育大学大学院 学校教育研究科 発達支援・心理臨床教育学系 講師 大宮こころの研究所 副代表)

若者の薬物使用の現状

近年、司法分野における覚醒剤の検挙者数は使用者の高齢化に加えて、若者が敬遠する傾向も重なり、減少傾向にあります。その一方で、大麻使用による検挙者数は右肩上がりに増加しています。これとは対照的に、2024年に実施された全国の有床精神科医療施設における薬物関連疾患の実態調査によれば、受診の契機となった薬物は、依然として覚醒剤が最多となっています。しかし、2020年以降は、睡眠薬や抗不安薬、市販薬といった「合法薬物」のグループが、覚醒剤に次ぐ問題となる薬物になっています。特に10代では、市販薬の乱用を理由に受診する者が急増しており、10代の薬物問題による受診理由の約4分の3が市販薬の乱用であることが明らかにされています。

では、彼らは、なぜ市販薬を乱用するのでしょうか?彼らは、気分の高揚や快楽を求めてというよりも、「シラフでいることが、つらい」という理由から、耐えがたい苦痛に対処するために、過量服薬(Overdose; OD)をしているのです。

ここで、私がスクールカウンセラーをしていた時に体験した高校3年生の女子生徒の事例を紹介しましょう。なお、ここで紹介する事例は、個人が特定されないよう本質を損なわない程度に情報の一部を変更しています。彼女は物静かな子でしたが、高校3年生の進級時のクラス替えで、親しかった友だちと離ればなれになってしまったばかりか、学年でも1、2位を争う元気な生徒が集められたクラスに所属することになってしまいました。彼女はクラスに馴染むことができずに孤立し、スクールカウンセラーをしている私のもとを訪れるようになりました。「本当は高校に来たくないけれど、高校に来ないとお母さんが心配するから」そんな思いを吐露しながら、私が勤務する日は、カウンセリングルームを利用していました。

その彼女が、ある時、過量服薬をしたことを教えてくれました。過量服薬をしたのは、修学旅行の時でした。クラスの適応が悪かった彼女にとって、修学旅行の班行動は苦痛以外のなにものでもありません。本音を言えば、修学旅行は休みたい。しかし、修学旅行を休めば、母親が心配することは避けられないばかりか、クラス適応がよくなかったことが露見してしまう。修学旅行を休んだという「問題」だけでなく、別の「問題」も発生する可能性がある。そう考えた彼女はインターネットを駆使して、1人孤独に対処することを選択しました。

班行動があったその日、彼女は市販薬を過量服薬し、酩酊状態でやり過ごしました。私に過量服薬の話を持ち明けてくれた際に当日の行動を確認しましたが、彼女は全くと言っていいほど覚えていませんでした。「修学旅行前に相談してくれていたら、他にやりようはなかったのかな?」という私からの問いかけに、彼女は、笑って「こんなことを話しても先生が困るだけじゃん」と言葉を返しました。彼女は、周囲の大人に自分の悩みを相談することができなかったのです。私は、スクールカウンセラーとして彼女が事前に相談できる環境を作ることができていなかった。その意味で、支援の限界と課題を突きつけられた経験でした。

なぜ人は薬物を使用するのか?



正の強化(快感の享受)

自己治療的な使用

Soichiro OMIYABE/Joetsu University of Education

18

研究が示す若年層の特徴

さて、学校現場の話から研究知見の紹介に話を戻して、先ほど紹介した調査結果のなかでも、市販薬乱用者に焦点を当てて再分析した研究結果を紹介しましょう。この研究結果によれば、市販薬乱用者は、30代以上の者に比べて、10代・20代に多いことや、1種類のみを乱用する単剤乱用者はコデイン含有薬を使用する一方で、2種類以上の複数の市販薬を乱用する多剤乱用者は、女性に多く、彼女たちは、多様な薬の効果求めて使用している可能性が報告されています。

また、救急外来を受診した市販薬乱用者を分析した研究からは、3回未満のOD経験者である非習慣群は自殺目的に乱用している一方で、3回以上のOD経験者である習慣群は、現実逃避や精神的苦痛の緩和のために市販薬を乱用していることが明らかにされています。この知見は、見方を変えれば、市販薬を習慣的に乱用している者は、“生きるために”市販薬を乱用していることを示唆しているとも考えられますが、習慣的な乱用者になる以前には、“死ぬために”乱用していた可能性も含まれます。事実、習慣的に市販薬を乱用している者の中には、「死ぬたら、ワンチャン、ラッキー」ぐらいに考えている人も少なくないため、死の危険性と隣り合わせであると言えます。彼らにとって市販薬は、孤独な戦いの唯一の武器なのかもしれません。

生きづらさと孤立が依存を招く

彼らが、苦痛に対処するために市販薬を乱用している可能性があることは既に紹介したとおりです。では、どのような出来事が、彼らに耐えがたい苦痛をもたらすのでしょうか？ 虐待、いじめ、貧困、あるいは親との進路対立（＝本人の思いが尊重されずに、親のコントロール下に置かれてしまう状況）などが挙げられるかもしれません。特に、虐待は、その後の人生に多大な悪影響を及ぼすことが知られていますが、薬物関連問題を引き起こすことが国内外のさまざまな研究から示されています。虐待は、自分が大切に扱われるに値しないことや、身近な人間は自分を攻撃することを体験的に学習することにつながります。このような体験は、他者に対する不信感や心理的な孤立を引き起こします。言い換えれば、人を信頼できなくなってしまうのです。

私たちは、日々の生活では大小さまざまな困りごとや、つらいなしんどいなという経験をします。しかし、彼らは、日々の生活で体験するネガティブな感情を人に話して解消することができないのです。困りごとが生じた時に、身近な人に相談することが難しいのです。そんな彼らが見つけた1人でできる対処法、それが市販薬の乱用なのです。Addiction（依存）は「孤立の病」と言われています。その支援には、孤立の対義語である Connection（人とのつながり）が必要であり、大切なのです。



相談できる力と場を育てる

最後に、薬物依存症支援の現場での考え方を踏まえて、薬物乱用防止の教育を行う際のポイントを紹介したいと思います。このポイントとは、薬物の危険性を伝える知識の教育だけでなく、「困ったときに人に頼れる力」を育てることです。「ダメ、ゼツタイ」に基づく恐怖教育を行うと、薬物を使った人＝ダメな人という印象を与えてしまいます。これでは、Connectionの対義語であるAddictionを促進してしまう可能性があります。

これも私がスクールカウンセラーとして体験した中学2年生の女の子の事例です。中学校で「ダメ、ゼツタイ」による薬物乱用防止教室に参加した後で、カウンセリングルームにやってきました。彼女は、感情のない表情で私にこう言いました。「お父さんが覚醒剤で刑務所に行っているんだよね。ダメ人間から生まれた、私はダメ人間に決まっているよね。」彼女を絶望の底に突き落とすには、十分な“教育”でした。

このエピソードが教えてくれることは、「困りごとを抱えている子どもの背後には同じように困りごとを抱えている大人がいる可能性があること」を考慮する必要があるということで学校現場や支援現場で活動していると、困りごとを抱えている本人の背後に、困りごとを抱えている大人がいることは少なくありません。困りごとを抱えている大人も、必要な支援につなげる視点が必要ではないかと思えます。

話を「困ったときに人に頼れる力」を育てることに戻しましょう。そのためには、日頃から相談をするクセをつけておくことが必要です。しかし、いざ困ったり、悩み事が出てきたときに相談するとなると、軽い困りごとや悩みであれば相談しやすいかもしれませんが、深刻なものである場合は、相談するときに勇気が必要になるかもしれません。その時は、信頼できる人や話をすると元気になれたり、笑顔になれたりする人に、勇気を出して相談してみるとよいと思います。そして、その時のポイントは、最低3人に相談してみることです。相談できる人が複数いることで、相談に乗ってもらえる可能性が高まりますし、問題解決をあきらめないことにもつながります。ぜひ、諦めずに3人の人に相談してみたいと思います。

さて、今は、子どもたちの目線のお話でしたが、大人は何ができるのでしょうか？ それは、子どもがSOSを出したときに、しっかりとその言葉に耳を傾けることです。勇気を出して発信したSOSを受け止めてもらう体験が、子どもたちには必要なのです。SOSを受け止めてもらえなかった子どもが、どんな体験するであろうかは、ここまでお読み頂いた方であれば、ご想像頂けますよね？

人を癒やすのは人とのつながり

薬物で得られる効果は一時的のしぎにすぎません。人を癒すためには、人とのつながりと支え合いが不可欠です。

最後に「私たちは、信頼してもらえる支援者、あるいは大人と言いきれるのでしょうか？」という問いを皆さんに投げかけて、筆をおきたいと思います。

- まとめ
- 薬物使用は、メンタルヘルスの問題と密接に絡んでいる。
 - 薬物使用（依存）からの回復のためには、本人が安心して話せる場が必要であり、継続的な支援が不可欠
 - 日本における薬物乱用防止教育は恐怖教育であり、偏見やスティグマを助長し、排他的風潮の醸成に一役買ってきた。
 - その結果、薬物使用（依存者）やその家族は、他者や支援機関に相談することができず孤立しがちな可能性がある。
 - したがって、薬物使用（依存）の予防および支援においては、当事者や家族の孤立化を防ぐことが必要となる。
 - つまり、自傷行為や自殺予防の文脈を踏まえたアプローチが必要なのである。
 - 薬物使用の問題は、人とのつながりの中で回復していく。

「なるほど!」を引き出す伝え方 ～伝えるから“伝わる”へ～

講師：藤田 潮（and Cs代表）

薬物乱用防止教室の講師として、より効果的に児童・生徒にメッセージを伝えるための「話し方・伝え方」の技術と心構えを学ぶための場として、参加者同士が意見や経験を共有し合い、さらに藤田講師からの講義を通して、自らの指導力を高めることができました。

伝えるための姿勢

藤田講師は、長年自治体や学校、企業など幅広い現場で人材育成やコミュニケーション支援を行ってきた経験から、講師が児童・生徒に効果的にメッセージを届けるための心構えと技術について具体的にお話しくださいました。単に「薬物はだめ」と伝えるだけでなく、困難な状況にある子供たちに寄り添い、支える姿勢の重要性を強調されました。また、講師自身の経験や身近な事例を交えることで説得力が増すこと、そして常に「子供たちの将来に適切に関与するために何をすべきか」という問いを持ち続けることが大切であると語られました。

伝わるための工夫

アメリカ国立訓練研究所が提唱する「ラーニングピラミッド理論」をもとに、一方通行の説明ではなく、参加型のやり取りや実演を取り入れることで学習定着率が高まること、そして同じ内容でも話し方や雰囲気によって伝わり方が変わることが紹介されました。小学校5年生にもわかる平易な言葉を使うこと、語尾まで明瞭に話すこと、会場全体に視線を配ること、厳しい内容ほど柔らかい表情と口調で伝えることなど、実践的な助言も多くありました。

◇手法別学習定着効果比較



「ラーニングピラミッド」アメリカ国立訓練研究所より

参加型の工夫と注意点

隣同士や小グループでの意見交換、○×ジェスチャーや静かにさせる合図など、参加者の集中を高めるための工夫や注意点も紹介されました。聞いていないように見える子供でも心に言葉が残る可能性があること、一言でも印象に残れば将来の行動のきっかけになること、そして緊張の克服には入念な練習や、うなずいてくれる聴衆をペースメーカーにする方法などが有効であることなどの助言をいただきました。

最後に

終盤には、参加者同士で服装や言葉の工夫、表情の作り方など日頃の実践例を共有する時間も設けられました。藤田講師は最後に、薬物乱用は決して遠い問題ではなく、講師一人ひとりが「助けてくれそうな大人」として地域に存在し続けることで、子供たちが安心して相談できる環境をつくることができると呼びかけられました。